

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 子どもの頃、「道草をしてはいけません」とよく言われたものである。学校から家に帰るまで道草をせずに、まっすぐに帰るようになると言われる。しかし、子どもにとって道草ほど面白いものはない。落ち葉のきれいなを見つけると拾って友人と比べっこをしたり、蟻の巣を見つけて、そのあたりで働く蟻の様子を見てみたり。それに何よりも興味があつたのは「近道」である。大人の目から見ると、それは迂路であり道草にすぎないのだが、何とか「近道」を見つけて、どこかの家の裏庭にはいりこんだり、時には畠を踏みつけたと怒られて逃げまわったり、まったくスリル満点の面白さであつた。

② 今から考えてみると、このような道草によつてこそ、子どもは通学路の味を満喫していた、と思えるのである。道草をせず、まっすぐに家へ帰つた子は、勉強をしたり仕事をしたり、真面目に時間をすごしたろうし、それはそれで立派なことであるが、道の味を知ることにはなかつたと言ふべきであろう。

③ ある立派な経営者で趣味も広いし、人情味もあり、多くの人に尊敬されている人にお会いして、どうしてそのような豊かな生き方をされるようになりましたかとお訊きしたら、「結核のおかげですよ」と答えられた。

④ 学生時代に結核になつた。当時は的確な治療法がなく、ただ安静にするだけが治療の手段であつた。結核という病気は意識活動の方は全然おとろえないので、若い時に他の若者たちがスポーツや学問などにいそしんでいることを知りつつ、ただただ安静にしているだけ、というのは大変な苦痛であ

る。青年期の一番大切な時期を無駄にしてしまっている、という考えに苦しめられるのである。

⑤ ところが、自分が経営者となって成功してから考えると、結核による「道草」は、無駄ではなかったのである。無駄どころか、それはむしろ有用なものとさえ思われる。そのときに経験したことが、今になって生きてくるのである。人に遅れをとることの悔しさや、誰もができることをできない辛さなどを味わったことによって、弱い人の気持ちがよくわかるし、死について生についていろいろ考え悩んだことが意味をもってくるのである。

⑥ このような生き方の道として、目的地にいち早く着くことのみを考えている人は、その道の味を知ることがないのである。受験戦争とやらで、大学入試が大変であり、ここでは大学合格という「目的」に向かって道草などせずじつじつに進む事が要請されているようである。しかし、実際に入学してきた学生で、入学してから頭角をあらわしてくるのを見てみると、受験勉強の間に、それなりに結構「道草」をくついていることがわかるのである。そんなことあるものか、と思われそうだが、^②このあたりが人間の面白いところで、道草をくついていると、しまったと思つて頑張ったりするから、全体としてあんがいじつじつまの合うものなのである。

(注) 迂路⇨遠まわりの道。 満喫⇨十分に満足するまで味わい、楽しむこと。

結核⇨結核菌に感染して起こる慢性の病気。

(河合隼雄「^{かわいはやお}心の処方箋^{しょうせん}」より)

問一——線①「道の味を知る」とあるが、これはどんな意味か。適切なものを次から一つ選べ。

- ア 思わぬ発見をしたり、新しい体験ができる。
- イ 勉強や仕事を怠けることを覚える。
- ウ 親に反抗して、自立していく。
- エ いろいろな道が発見でき、通学路にくわしくなる。



問二——線②「このあたりが人間の面白いところ」とあるが、筆者はどんなことを「面白い」と言っているのか。適切なものを次から一つ選べ。

- ア 目的地にすんなり到達することが出来ない人は、弱い人の気持ちがよくわかったり、死や生についていろいろ考え悩んだりすること。
- イ 大学入試に向けての受験勉強は非常にたいへんだが、こつこつと時間をかけて努力しただけの効果は必ずあらわれるということ。
- ウ 目的に向かってひたすら努力した人よりも、いろいろ思い悩んだり違うことに手を出したりした人のほうがあとで伸びること。
- エ 受験勉強の間にいると「道草」をくっている人のほうが、結局は大学合格という目的に到達することができるということ。

